

MfG_J_Mikuni_kaido_in_Settdaya

摂田屋村の三国街道路線

1. 摂田屋の旧三国街道のストーリー
2. 三国街道 長岡・摂田屋周辺の推定
3. 上組史料雑考 の「上組村交通系」

参考 三国街道・摂田屋の図（新潟県教育委員会編）

参考 相給地

参考 安禅寺は、東叡山寛永寺の末寺

参考 村名「接待屋_摂待屋」と「摂田屋」の並立の時代について

MfG_J_Origin_of_Name_Settdaiya の目次を次ページに示しました。

『大峰山と行者の道 ～ 摂田屋の地名は「接待屋」から』、という視点からの考察です。

参考 接待屋_序 MfG_J_Origin_of_Name_Settaiya

大峰山と行者の道 ～ 摂田屋の地名は「接待屋」から

序

洋の東西を問わず、地名の成り立ちには、それぞれの場所の歴史が関係していることが多いと思います。

村松は、古くは村間津と書き、村々の間にある湊という地名から見られるように、信濃川流域の湊のひとつであり、栖吉とともに、中越の中心地のひとつでした。摂田屋の地名の由来として諸説ありますが、ここでは、7に示したように、支配地が細分化された「相給地」という慣習から、「接待屋」、「田屋」などの地名が各々の場所で使われていたと考えました。その上で下記の資料を参考に、

(*1) 長岡市編,「長岡市村松町の中世を歩く」,長岡市史双書No10 (1990)

(*2) 菊地章太,「十二山ノ神の信仰と祖霊観(下)」,東洋大学・福祉社会開発研究Vol3,(2010)

(*3) 小林芳郎,「しとのぎ荘摂田屋の考察」,長岡郷土史 第53号(2016)

大峰山や山古志方面を目指す修験僧や旅人の休息場所、宿としての「接待屋」にあるという説から説明を始めています。村松地域が、円融寺、大峰山から鋸山、山古志、小千谷の山岳修験道の入口であり、摂田屋が、その接待所、宿舎が集積する場所であったという説も、さもありなんと、納得いただけると思います。

1. 「接待屋」説について
 - (1) 歓喜寺の「接待屋」説とは (*3)
 - (2) 霊峰・金倉山
 - (3) 行者の道とは (*1)
2. 修験道の図

--- 以下、関連する話題を集めた ---
3. 円融寺記による円融寺の由来 (*1)
4. 円融寺の参考図
 - (1) 円融寺周辺図 (*1)
 - (2) 中世円融寺境内の復元図 (*1)
 - (3) 大峰山周辺図 (国土地理院地図)
5. 釜沢観音堂と満願寺
6. 鋸山、高彦根神社、栃尾の秋葉権現、栖吉の普濟寺と奥の風谷山
7. 結論と相給地

詳細 並立の時代の詳細

「接待屋」と「摂田屋」は並立した

村松関連のできごと

13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
紀伊の歓喜寺、古志の円融寺	村松・栖吉が中越の中心地で、金倉山周辺に修験の地	満願寺、円融寺大峰山の麓に宗教都市誕生	満願寺、円融寺上杉棄民一揆で突如崩壊

1. 摂田屋の旧三国街道のストーリー

参勤交代の牧野の殿様は、ここ摂田屋の旧三国街道では、天領であることに慮って、下馬して通行した、というのが、ガイドの定説のようです。しかし本当かなと、疑問をもっていました。天領というのは誤りで、蔵王神社、亦は別当寺の安禅寺の寺社領という説が正しいのですが、それはそれとして、そもそも藩主なのですから、領内を出歩くところにそんな場所があったら、別の迂回するルートを作るよう命じるのが自然ではないかと思ったのです。

そんななか、三、四年前、秋山ポスター美術館のリーフレットの中に、旧三国街道とは別に、溝橋から定明の間に「牧野侯通り」という道が示されているのを見つけ、2. の三国街道 長岡・摂田屋周辺の推定、にまとめました。

そして最近、昭和十二年発行の「上組史料雑考」のなかの、上組村交通系の図や説明文を見ているときに、「牧野侯通り」、「参勤交代道路」という文字を見つけ、「牧野侯通り」の存在に、確信をもちました。その図を、3. の上組史料雑考 に示しました。しかし三国街道の代表的資料と思われる新潟県歴史の道調査報告書(1995)の中の、三国街道・摂田屋の図には、この「牧野侯通り」は示されていません。何故でしょう。

このような。“摂田屋村を迂回する”殿様の道の存在があからさまに伝えられなかったのには理由があるはずで、もしかしたら殿様の一行以外には使用されず、住民には無縁の通行路であったからではないか、と私は思っています。

それに対して、“摂田屋村を通る”三国街道は、長岡藩領と蔵王神社、或いは別当寺の安禅寺の寺社領がモザイク状に混ざりあう「相給地」の中を通ります。だからこそ、どちらの関係の人だろうと、一般の旅人も含め、皆が安心して主要道路として日常、使っていたのでは、ないでしょうか。

即ち「牧野侯通り」は、地図などに示す必要のない、長岡藩でさえ日常は使用しない「藩の私有道」だったのではないか、というのが、私のストーリーです。

でも、「徳川将軍家に慮って下馬して通行」という話も、譜代の殿様の奥ゆかしさを示すハナシとして、ゲストには好評かも知れません。

実際、ときには殿様も下馬で通ったこともあったのかも知れませんが、非公開で特定使用なのですから、ガイドの説明としては、どちらでもいいのでは、と思っています。

2. 三国街道 長岡・摂田屋周辺の推定 © KASUGA

20200815 摂田屋城の位置を、
吉乃川よりに改訂。

はじめに。

本稿は、摂田屋、定明を対象としています。摂田屋周辺の位置になじみのない方に、簡単な説明をしておきます。

なぜ定明を含むか、ですが、ひとつは、サフラン酒の創業者の生誕の地であり、商売開始のところであること、もうひとつは定明城、太田川が話題になる、という二点からです。

本論で示す図1. の長岡城近くの図、 図2. の宮内から摂田屋北部の図、 図3. の摂田屋から定明の図の範囲を、下記の参考図の中に書き込みました。



摂田屋、定明地区

- 図 1. (1) で、牧野侯通のことを話します。
 牧野侯通があつたらしいということは、たまたま宮内の秋山孝ポスター美術館の資料で知りましたが、実際のところ、「牧野侯通」に関する情報は、市立中央図書館で調べてもらっても、何も出てきませんでした。
 もしかしら参勤交代や領内検分など、領主のためだけの道だったのかも知れませんが、領内に点在する寺社領を迂回する道は、むしろ、存在して、当然と思います。
 あの辺を歩きますと、そういった道が通っていたのは、ここではないかと、思えるところが、随所にあります。
 ここでは、いわゆる旧三国街道の江戸街道と、牧野侯通の話をしします。
- 図 2.
- 図 3.

(2) では、定明城と摂田屋城、鷲の巣城、そして上条城の話をしします。

上杉勢のなかの争いに、これらの城が登場し、古刹・定正院の開基、そして吉乃川の創業に関係していることが分かります。

補足には、江戸街道と牧野侯通の合流の位置の推定に使用した、長岡市教育委員会編の資料の一部を掲載させていただきました。
 この図を使って、鷲の巣城、上条城の位置も、説明します。

(1) 江戸街道と牧野侯通



推測

1. 辻地蔵から吉乃川 の場所は 蔵王神社・安禅寺の寺社領である。
(ガイドの会でも、寛永寺支配の蔵王社領と説明している人が多い)
2. 長岡藩領の定明と、寺社領も混在する撰田屋の境は、太田川あたりらしい。
3. 宮内・溝橋から、宮内5丁目にかけて、おそらく、これが牧野侯通りではないかと思われる道がある。(実検による)
4. 県道の西側、現在の定明町の内側 にも、おそらく、これが当時の三国街道では、と思われる道がある。(実検による) (教育委員会編の図の、西に屈曲している部分) ~ 牧野侯通と江戸街道の合流点を、現在の太田橋あたりとする、春日案の理由

(2) 定明城と摂田屋城、鷺の巣城、上条城の話

<http://www.asahi-net.or.jp/~qb2t-nkns/jyoumei.htm>

<http://kojyosikyo.main.jp/Nagaoka-C/Jyoumyou-Jo/Jyoumyou-Jo.htm>

の記述を参考にしました。



定明城は、定明地区の北端にある八幡神社境内と周囲の水田・畑地一帯に築かれていた。

現在は、遺構は消滅している。

摂田屋城は、太田川の対岸にあったらしい。

三国街道の江戸街道（青）と牧野侯通り（茶）は、春日の推定。

図3. 摂田屋、定明

(摂田屋城は) 上条城に拠った上杉憲顕に関連する要害であった可能性がある。

(定明城は) 鷺巣城に拠った上杉修理太夫定正の長臣(重臣)の上杉定明の要害と伝えられており、八幡神社地区は外郭と思われる。

定明の八幡宮

大正15年改修記念碑

吉澤仁太郎が1,500円の寄進、
他 1,000円前後で二、三十名ほど

紀元2600年奉納塔、(写真の右が奉納塔)

昭和58年 改修碑もある。



稲川明雄さんの撰田屋誕生の歴史、ほか、いろいろな情報を参考にすると、概ね、次のような流れが浮かんできます。

このあたりの城のなかでは上条城が最初に築城されたようで、鎌倉時代の末期から南北朝時代にかけての武将、守護大名であった上杉憲顕が、越後初代の守護職として、この地に城を築き、越後北朝軍と共に各地で転戦したと言われています。(1350年頃)

長岡一帯は南朝・北朝方の狭間にあたり、在地領主も敵味方に分かれ、敵味方に分かれ戦いに明け暮れたようです。

(http://www.kome100.ne.jp/main/contents/cec/naga_data/nagaoka/rekisi/busi/index3.htm)

そして戦国の初期、川上、幡(はた)、梶山氏などが、撰田屋の有力土豪として城を築き、村を守ることとなります。

撰田屋城主川上主水義春は、下野国(栃木県)の川上郷(那須らしい)に興った川上氏が越後にのがれ、長尾氏のために軍功があり、天文12(1543)年の夏に撰田屋城主となったとされています。

この天文12年は長尾景虎(のちの上杉謙信)が、14歳で栃尾に来た年であり、越後の動乱の始まったころです。

吉乃川(川上氏)の創業は、天文17(1548)年で、何らかの関わりがあると思われます。尚、最終的な撰田屋城落城は、天正7(1579)年5月とされています。

また、近くの鷺之巢の定正院は、伝説によれば、以下のようです。

在かの太田道灌と戦った関東管領上杉定正が、1492年頃に城を兼ねた庵を建てて、法体として住み、後に、この地に家来の僧が定正菩提所として、定正に因んだ定正院として開基したとの説。定正院の山は結構大きく、奥をグルリと回って山を下りると、横枕町のお福酒造の近くに出ます。鷺の巢城は、このように大きな城郭だったようです。

以下は、撰田屋に関わる雑談です。

撰田屋から東を望むと、市営スキー場の脇に、城山が見えます。

この城山の城が栖吉城で、上杉謙信の母である虎御前が、この栖吉城の城主であった長尾房景の娘であったことから、一説では上杉謙信生誕の地と言われています。

若き謙信は、往時、栖吉城、栃尾城を見渡せる、このあたりから、謙信の姉・仙桃院の住む南魚沼の坂戸城の間を走り回ったに違いないと思っています。

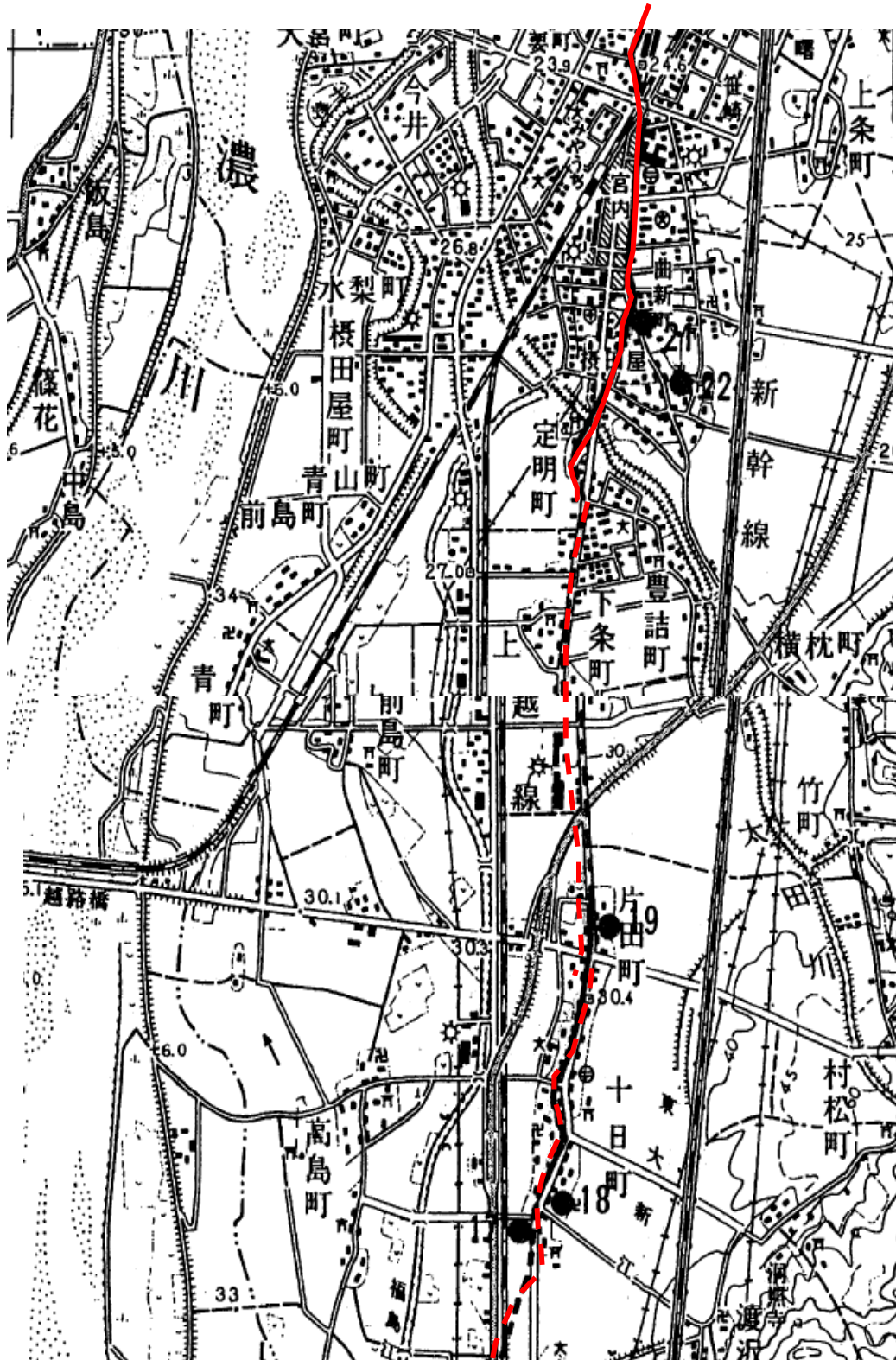
定正院の開基は春日山林泉寺の住職とのことですが、年代は調べ切れれておりません。

今後、明らかにしたいと思っています。

参考 三国街道・摂田屋の図（新潟県教育委員会編 1995）

三国街道・摂田屋の図 新潟県歴史の道調査報告書（新潟県教育委員会編）

旧三国街道のルートを示す。



沢田跨線橋の下部あたりで、旧国道ではなく、東に曲がり、農業高校の正面玄関の西側を通り、越のむらさきさんの前の辻地蔵に向かう道が、三国街道のルートとして、示されています。



7. 参考 相給地

20190718 春日

改訂20200815

最近、相給地(あいきゅうち)という言葉を知りました。
江戸期に、摂田屋が長岡藩領、蔵王神社社領が、明解な境界線で区切られているのではなく、モザイク状に領地が細分化されていたらしいということは、長岡造形大の平山育夫先生の研究調査を聞いて知っていました。これが「相給地」というものだったということです。(詳細は※注記参照)

この「相給地」という支配形態は珍しくなかったようです。一つの村を旗本の五家で細分し、この「相給地」を代表の旗本に年貢などの管理を委託することは常態化していたそうです。しかし、ここ摂田屋のように、藩領と寺社領が細分化となると、いずれかに任せるといってもいかならないと思います。すると、支配者としては、いずれかの立場に沿った地名を使うのは、やりにくく、むしろ別々のほうが合理的です。そこで、書類上の名称なり地名の呼び名を変えたほうがいいということになりますが、せめて書類上で区別できるなら、呼び名は同じ方がいい、と考えた人もいると思います。では、どうするか、改めて考えますと、いい考え方が思い浮かびました。つまり、長岡藩領の人々は田屋という地形から「摂田屋」と呼び、蔵王神社社領の人々は修験行者の町ということで「接待屋」と呼んでいたとしても、何の不思議もないのでは、と思ったのです。長岡の地元の郷土史史料である、「上組史料雑考」(昭和12年刊行)にも、1800年代の前半、長岡藩領では田屋、「摂田屋」と呼ばれていたが、蔵王代官が「接待屋」という呼称にするよう領内に命じたとの記述があります。「摂田屋」、「接待屋」のどちらが本当か、いつまでも決着がつきませんが、もしかしたら上記のように、「両名併記」だったのではないか、と思い至った次第です。

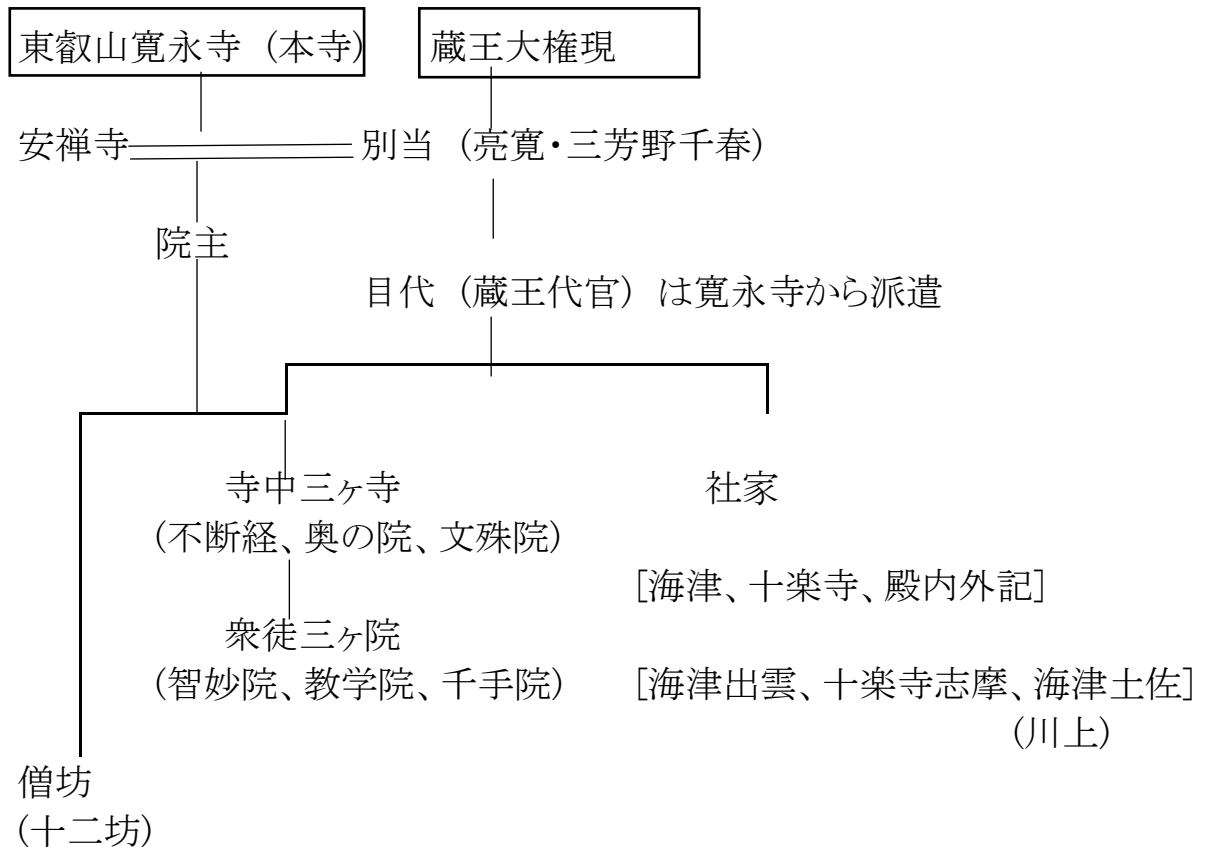
※ 相給地(あいきゅうち) Wikiより

江戸時代、1村が2人以上の地頭または領主によって領知されること、またはその知行地。1村が分割領有されるので分郷(ぶんごう)ともいう。江戸時代の知行割は村高を基準に1村単位で給与されるのを原則としたが、相給方式をとることがしばしば行われ、江戸時代知行制の一特色となっている。

区分けの方法は、村を東西や南北などの地理的条件により一律に区切るといってはせずに、各田畑の良し悪しなどを考慮して個別に帰属が決定された。したがって相給の村内ではモザイク状に領地が形成された。

参考 安禅寺は、東叡山寛永寺の末寺

安禅寺は、東叡山寛永寺の末寺で、
幕府から朱印地三百石を与えられ、蔵王大権現を管理した。



(長岡市史通史編上巻 p691)

安禅寺は、蔵王権現別当

別当寺(べつとうじ)とは、専ら神仏習合が行われていた江戸時代以前に、
神社を管理するために置かれた寺のこと。

神前読経など神社の祭祀を仏式で行い、その主催者を別当(社僧の長)と
呼んだことから、別当の居る寺を別当寺と称した。

詳細 村名「接待屋_撰待屋」と「撰田屋」の並立の時代について

1. 書類の意図

「撰待屋」と「撰田屋」は並立した

長岡藩領の「撰田屋村」

安禅寺領の「撰待屋村」

撰待屋村の村役が、長岡藩の役所に提出した、村役の兼務願い書である。

接待屋村と撰田屋村の庄屋を兼務させてほしいという、
安政六年(1859)、接待屋村の庄屋から安禅寺の役所に届け出た文書。

2. 安政六年 1859 は、どんな時代だったか

1853年(嘉永6年)	～黒船来航
1854年(安政元年)	
1855年(安政2年)	～安政江戸地震
1858年(安政5年)	～安政の大獄
1859年(安政6年)	長岡藩領の「撰田屋村」 安禅寺領の「撰待屋村」
1861年(万延元年)	～桜田門外の変
1862年(文久元年)	～生麦事件
1862年(文久2年)	～生麦事件
1863年(文久3年)	～薩英戦争
1867年(慶応3年)	～大政奉還

3. 撰 の字

①とる。取り入れる。「撰取」「包撰」	接心／撰心 せつ-しんの説明
②かねる。代わって行く。「撰政」	1 心が外界の事物に触れて感ずること。
③ととのえる。おさめる。やしなう。 「撰理」「撰生」	2 仏語。 ㊦精神を集中し、乱さないこと。
④「撰津(せつつ)の国」の略。「撰州」	㊧禅門で一定の期間、座禅をすること。

4. 何のお客、旅人を接待

誰も言っていないようですが、私は、当初は、大峰山や金倉山への修験者、そして中世には大峰山の麓にあった、満願寺、円融寺という七堂伽藍を備えた大寺院の参詣者ではないかと思うのです。云われている都野神社参詣者説は、撰田屋に遠いため、無理があるように感じます。
みな、16世紀に上杉棄民一揆で崩壊しましたので、一切が不明ですが。

村名「摂待屋」と「摂田屋」の並立の時代 安政六年
「摂待屋」と「摂田屋」は並立した村名

乍恐以書付奉願上候 (読み下し文略)

藩村役録之儀、前々私所持仕来候処、進退不如意ニ罷成、先年願上堀金村庄屋専左護門方江質地ニ差向、當節年明之所、金子調達出来兼、無余儀今般流地之図リニ對談仕候得共、當村

方之儀者、御案内被為下置候通り、長岡御領摂田屋村人組田畑家立共、悉入交り内実一村同様之村柄ニ候処、畢竟御双方御役儀共、從來私方ニ而相勤候故、是迄無事ニ相治候儀ニ付、後年ニ至り万一村役場引分連、両庄屋等ニ相成候而者、未々両村共必至与立行兼候次第、百姓一同心痛仕、右之訳柄申入、双方熟談之上、御役儀者是迄之通り達次方ニ而、永々相勤候究、且後年ニ専左護門方不差操ニ而、右役録手放し候節者、時之相場を以、達次○村方江讓返し呉候図り、役諾規定書今日為取交之候間、何卒以格別之御慈悲、此段宜御聞濟被成下置度、別紙差上候役録之儀者、右専左衛門江被仰付被下置度、奉願上候、以上

安政六未年二月

長岡御領
摂田屋村

摂待屋村

御役所

奉差上書付之事

一 村絵図面 式 枚

右願人

摂田屋村

組頭 達次 印
惣頭 左衛門 印
甚 右衛門 印